台詞の風景

別役 実

台詞の風景

別役 実

白水社

著者略歴
一九三七年満洲にて生まれる
一九六〇年早大政治経済学部中退
劇作家
第十三回岸田戯曲賞受賞
主要作品
「象」「マッチ売りの少女」
「移動」「にしむくさむらい」「太郎の屋根に雪降りつむ」「うしろの正面だあれ」〈戯曲〉
「淋しいおさかな」「そよそよ族伝説」〈童話〉

台詞の風景

一九八四年三月一〇日第一刷発行
一九八五年一月二五日第二刷発行

著者　© 別役実（べっやくみのる）
発行者　高橋孝
印刷者　田中昭三
発行所　株式会社白水社
東京都千代田区神田小川町三の二四
営業部〇三(二九二)七八一一
電話　編集部〇三(二九二)七八二一
振替東京九一三三二八
郵便番号一〇一

理想社印刷・黒岩製本

ISBN 4-560-03227-0

台詞の風景

裝幀　長新太

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

台詞の風景　目次

I 台詞の風景 7
II 私語の世界 113
III それぞれの仕事 171
ピンターの方法 173
三島戯曲の方法意識 『サド侯爵夫人』の構造 181
劇、素材とその方法 193
ベケット空間の解体 201

IV アトリエの仕事 227
生活空間の可能性について アトリエの仕事 229
「死なう団」について 267
小市民について 271
えっ？ 275
無意識の加害者と無意識の被害者 279
共同体（ムラ）の兵士たち 283
あとがき 287

I

台詞の風景

雪

ばってん、やっぱ、うちはお恵みにふさわしゅうなか。世の中から愛されんじゃった私は、私自身に復讐しましたと……その外道の歓喜のなかで、あなた様ばお慕いしておりました。ひいてはその復讐は世の中へ向かってゆきました。そのためには、あなた様ば、かどわかす仲間ば作ったとです。そるが今夜です、雪の降る今夜です。マリア様。哀れな私たちのこの企てば、お救け下さいまっせ、お願いです。

（田中千禾夫『マリアの首』一九五九年）

原爆で焼けた浦上天守堂が取り壊しをされることになって、それに反対する何人かが、その玄関前にすえられたマリアの首を、ひそかに盗み出す計画をたてる。もし長崎に、「雪の降って積もる夜のあったら」その時こそは浦上の天守堂に集まって、計画を実行しようと、街頭の詩集売りや、娼婦や、貧しい印刷工などが、それぞれに連絡をとりあうのである。そしてこれはその終幕の雪の夜、看護婦でもあり娼婦でもある「鹿」が、その盗み出すべきマリアの首に、ひとり語りかけている場面である。

「幻に長崎を想う曲」と副題にあるこの戯曲について、私はひそかに、「雪を降らせてみせようと決意して、まさしくその通り、雪を降らせてみせた」戯曲である、と考えている。雪が降ることの美しさが、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

単に風景としてではなく、たましいのおののきとして、これほど感動的にとらえられている舞台はないのではないだろうか。

ある新劇の演出家が、九州の古い芝居小屋を訪ねた時に、その小屋主に言われたそうである。「新劇はつまらない。なぜって、雪が降らないんだからな」。九州だからそうなのではない。どこへ行っても、舞台に雪の降る情景というものは、それだけで感動的なものである。

三好達治の詩に「太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ」という一節がある。ここに流れる悠久の時間と、そのもとで安らぐ生活の息づかいについて、我々はよく知っている。もしかしたら、降りしきる雪というのは、我々の存在の余分なものを、すべてそぎ落として眠らせる働きをするのかもしれない。だからこそ、そこで覚めて立ちあがった意識を、より際立たせる働きをするのだろう。

そのうちに新劇だって、雪の降らない舞台はない、ということになるかもしれない。

嵐

明日、また明日、また明日と、時は小きざみな足どりで一日一日を歩み、ついには歴史の最後の一瞬にたどりつく、昨日という日はすべて愚かな人間が塵と化す死への道を照らしてきた。消えろ、消えろ、つかの間の燈火！　人生は歩きまわる影法師、あわれな役者だ、舞台の上でおおげさにみえをきっても出場が終われば消えてしまう。白痴のしゃべる物語だ、わめきたてる響きと怒りはすさまじいが、意味はなに一つありはしない。

（シェイクスピア『マクベス』小田島雄志訳　一六〇五年）

五幕第五場、ダンシネーンの城内で、破滅寸前のマクベスが言う台詞である。この直前に、マクベスに国王暗殺をそそのかしたマクベス夫人の死が告げられ、そしてこの直後に、その時こそマクベスの最期であると予言された「バーナムの森がダンシネーンに向かって進軍してくる」事実が、告げられるのである。つまりマクベスは、そのほんのつかの間の孤立に、打ちひしがれまいとしてわめいているのだ。

言うまでもなくここでは単に、人生は「つかの間の燈火」であり、「歩きまわる影法師」に過ぎない、ということを言おうとしているのではない。にもかかわらずそれが「小きざみな足どりで一日一日を歩み」、厳粛に、そして確実に、人々をとらえてはなさないのであるという、その残酷さを言っているので

ある。

二幕第三場の、国王暗殺が発覚した直後にマクベスは、「このような不幸の起こる一時間前に死んでおれば、私は幸福な生涯を送ったと言えただろうに」と、つぶやいている。さらに一幕第三場でマクベスは、やがて国王になるであろうと予言された不安と恍惚の中で「どうなろうとかまうものか、どんな荒れ狂う嵐の日にも時間はたつのだ」と言っている。ということから考えてみれば、マクベスは常に「ゆっくりとした時間」の中にあって、それをもてあましていたのだということが、よくわかる。

もしかしたら我々の時間は、我々の人生への意志に比較して、ほんの少しのろく設計されているのではないだろうか、と私は時々考える。我々の不運とか不幸は、我々の意志がそれを追い越した時にそれと気付くのであって、それさえなければ、たとえ我々が事実不運であったり不幸であったりしても、気付かずに過ごせるのではないかと思うのだが。

鳥

こうして書きとめているんです……主題（テーマ）がひらめきました……ちょっとした短篇の主題です。湖水の岸に子供のときから、こういう、あなたのような若いむすめさんが住んでいます。かもめのように湖水を愛しています。そして幸福でもあり、自由でもある、かもめのようにね。ところがひょっくり人がやって来、みつけて、所在なさにそのむすめを破滅させました、ほらこのかもめのように。

（チェーホフ『かもめ』湯浅芳子訳　一八九六年）

二幕、功成り名遂げた作家のトリゴーリンが、女優にあこがれる村娘のニーナに話しかけられて、さり気なく答えている台詞である。この後ニーナは、トリゴーリンを慕ってモスクワに行き、彼には捨てられ、女優としても幻滅を味わうのだが、そのことを考えると、このさり気ない言葉の中に、ひやりとするような残酷さがひそんでいるのが、よくわかる。特にそのことを、決して大作ではなく「ちょっとした短篇の主題です」と言っているのが、いかにも皮肉である。

もちろんこの会話は、湖水の見える真昼の庭先で、人々がのんびりとくつろぐ中で交わされているのであり、この時にはまだトリゴーリンも、そしてニーナも、この言葉が残酷であり、しかも皮肉な意味

を持つであろうことに、はっきりとは気付いていない。そのことがまた、この台詞をふっくらしたものに、仕立てあげているように思う。

いつか私は、或る名のある作家と話をしていて「失礼、ちょっとアイデアがひらめいたものでね」と、やられたことがある。彼は私との話を中断してポケットから手帳を取りだし、しかつめらしい顔をして何やら書きこみ、ふんふんとうなずきながら、それをまたポケットにおさめてから言った。「何か思いつくと、忘れないうちにこうやって書いておくんだよ。君も、物書きになるんだったら、こういう癖はつけておいた方がいいね」。

相手が女優志願でなかったせいか、トリゴーリンほど「キマッテ」はいなかったが、その作家もまた、この場面を見て感動したに違いない。こういうことは、やはり一度はやってみたくなるものである。私もまた、かねてからねらってはいるのだが、私は相手と話をしながらアイデアがひらめくタイプではないし、ひらめいた時には手帳を持っていなかったりして、いまだに成功はしていない。

夢

わッわッわッ
ずんぱぱッ
織田信長の謡いけり、
人間わずか五十年、
夢まぼろしのごとくなり、
かどうだか、
知っちゃいないけど、
やりてえことを、
やりてえな、わっ
てんで、
カッコよく、
死にてえな、ぱッ
んぱ、んぱ、んぱ、
ずんぱぱッ

（福田善之『真田風雲録』一九六二年）

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook